

南總里見八犬傳第六輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第五十五回

馬大記賺言して途小龍山を窮せしむ  
粟飯原滅族せられて里小犬坂を逃せ

品七も血小乗して馬加が隠匿の長物より不時を移せ小文吾耳を側之る感嘆  
膝の進むを覺え春の日は只をせり。短とみんあひる。當下品七小文吾が泣て  
出せ。茶を遠くくも喫く縁頬のほろり多。扇を把之膝小突建る程小馬加  
大記常武の夜の腹心の若黨をわちこちへ差向く。粟飯原亂度が起行や否と  
見よ之遣せよ。此詰旦歸きて粟飯原敵ハ黎明の比主棧大約十人許行  
装を整へて栗橋のうへに赴知ぬ。報く常武はうも領き。日赤塚の  
城小伺候して時夜の安否を訊せしむ。自亂對面あひひく。きの八守此

秋野  
揚善院



八犬傳第六輯卷之三

南總里見八犬傳

御内意を傳へられ。怡悦の至り。謹く兼せぬ。就之送りあり。嵐山の節。小條  
落葉との予が秘藏の両刀を相添え。これを胤度不齋。今朝を許我へ  
遣し。と仰り。果て常武。はらも駿たる。面を。と。そのあつた。は。あつた。を。へ  
某。は。内意を。傳へ。る。多。く。傳へ。る。一。は。比。胤度。を。某。が。宿。所。に。お。か。せ。た。か  
相。譚。ひ。語。次。小。當。家。の。重。宝。あ。り。一。山。の。一。節。截。ハ。貞。胤。朝。臣。より。六。世。相。傳。の  
秘。物。も。赤。塚。殿。の。御。事。を。傳。へ。た。この。後。和。教。の。計。は。是。れ。恩。借。と。許。せ  
ぬ。と。傳。へ。た。と。又。他。の。事。も。あ。つ。た。某。を。諾。ひ。て。御。秘。藏。の。重。宝。を。り  
とも。他。の。事。も。あ。つ。た。と。傳。へ。た。御。事。の。所。望。何。も。苦。い。か。る。べき。近。日。便。宣。を  
は。貸。進。仕。と。約。束。を。り。昨日。か。の。笛。を。携。へ。る。胤度。が。宿。所。に。赴。死  
前。約。の。一。節。截。を。持。系。して。是。御。事。の。後。速。不。返。せ。あ。つ。た。その。恩。借。を。り  
と。期。を。推。して。胤度。不。齋。と。し。ひ。た。あ。つ。た。その。恩。借。を。り。公。私。の。所。要。を。相。替。て

おの又もく。に。外。あ。れ。ば。も。休。退。出。ひ。ひ。亦。小。彼。笛。を。故。か。く。他。家。へ。渡。す。か。ら  
緯。某。が。越。度。と。あり。と。忽。地。不。罪。蒙。る。と。愚。中。の。胤度。不。欺。れ。悔。い。は。と  
い。声。怒。を。あ。り。頻。々。嘆。息。し。て。な。れ。自。胤。の。そ。ろ。も。駭。た。そ。の。安。ろ。ぬ  
構。事。多。り。胤度。の。年。來。忠。信。無。二。の。老。黨。と。あ。ひ。い。め。を。あ。ひ。た。と。り  
奸。曲。の。あ。つ。た。この。り。必。情。由。あ。べ。い。あ。ひ。合。さ。る。と。い。か。れ。や。と。問。れ。て。常。武  
頭。を。傾。け。その。り。か。は。な。も。ゆ。ゆ。と。進。し。る。世。の。風。は。小。栗。飯。原。首。胤度。ハ。千。葉  
族。の。系。小。誇。り。主。君。清。兄。弟。を。推。倒。し。武。藏。七。郷。葛。西。三。十。ヶ。莊。の  
米。邑。を。横。領。せ。んと。竊。に。計。較。し。成。氏。朝。臣。小。内。心。と。逆。心。既。に。その。間。か。し。と  
以。小。の。え。ひ。ひ。が。あ。つ。た。怒。あ。つ。た。誑。奸。あ。つ。た。と。あ。ひ。捨。て。か。の。疑。は。れ。ひ。原。來  
實。事。を。ゆ。ひ。た。と。い。ふ。自。胤。氣。色。変。ろ。あ。つ。た。要。時。に。捨。置。く。誰。か。あ。ら。は  
と。く。逸。東。太。を。召。よ。せ。と。烈。し。に。仰。小。當。番。の。近。臣。忽。地。奔。走。し。と。時。を。移。さ

呼よびつ程ほど不ふ常じょう武ぶハハ模も濟ぜい一いつととめめ心こころをを色いろ中ちゆうももんんせせババ遠とほ侍しやくをを退ひきかれる  
一いち程ほど不ふ當たう城じやう第だい二にのの老らう黨たう有あるる。龍りゆう山さん逸いつ東とう太たい縁えん連れんハハ猛まうのの召めい小せう物ぶつ有あるる。毛もう  
赤あかままくく山さん前ぜん不ふ事じりりとと自じ亂らんおおもも召めい近ちんつつけけくく亂らん度どがが度どのの趣しゆ箇こ様やうをを  
送おくりかかくく辭ことばせせららしくしく説とく示ししてして汝なんぢ今いまよりよりささかかりり立たてて亂らん度どをを追お追おめめよよ。おおりり不ふ渠けハハ  
路ち程ほど五ご六ろく里りももおおひひおおんん。若わか早はや敵てき地ち不ふ到たうりりをを進しん退たい尤なほ不ふ便べんおおべべ。栗り橋はし有あり  
ここをを追お追お者しやく人にんとと肝かん要えうささららとと鹿か忽いつのの舉あ動どうししとと暴はつ立たたたるる後ご悔くわい其その欲よく  
只ただ何なにととかかくく命いのちをを傳つたへへくく。いいひひ送おくせせららずずああれれがが對たい面めんししととわわんんとと欲よくせせ速すみ小せう還わん  
いい。告つげげてて且かつもも氣き色しきををささすす。亂らん度ど野や心しんかかくく。んん中ちゆうをを疑ぎひひせせてて死しののままつつべべいい  
一いちふふもも命いのちをを聽きぎぎてて推お推おくく。彼かの地ち不ふ邁まいんんとと欲よくせせばばそのその逆ぎやく心しん分ぶん明めいかかりり方ほう便べんをを  
おおつつくく再さい々ざうとと搦な捕とくくととくくおおてて来きよよ。衆しゆう敵てき有ありり加か勢せう有あるる亂らん度どをを擊う偏へんをを  
嵐らん山さんのの笛ふエ二に口くちのの名な刀たうををととりり復たがささるるああるる。いいままをを空そらううしてして立たたたるる。いいままはは汝なんぢを

疑ぎんんよよくくせせよよかか。とと仰おほまれれ。縁えん連れんハハ一いつ殘ざん不ふおおももんん。欣きん然ぜんととてて言こと兼けんししつつ  
席せきとと蹴く立たてて退ひきかれる。程ほど不ふ常じょう武ぶハハ遠とほ侍しやくのの建けん屏びんのの蔭かげににおおりり。今いま縁えん連れんががそのその  
ほほろろとと過すぎぎをを竊ひそかか呼よ笛ふエめめりり。御ご邊へん大だいににおおんん使しをを策さくししめめありり。朋とも友とものの情なさけ然しかららずず  
いい。某なつか今いま一いつ言ことををめめくく。驢ろととせんせん飲いん御ご邊へん亂らん度ど不ふ追お追お著しやく。豫よてて了ら簡かんああるる。死しららんんとと  
痛いた度どおおれれとときき誰たれもも亦また御ご邊へんとと肩かたをを比ひぶぶ。ああるる。んん自じ亂らんのの石いし濱はま不ふ移うつりりああるる。不ふ  
及およびびくく。某なつかもも亦また下くだ風かぜ不ふ立たべべ。かかおおりり脱だつ落らくああるる。ととそのそのををれれ縁えん連れんをを  
真ま中ちゆう不ふ曉きやく得えくく。莞わん尔にととわわ笑わらむむ。其その趣しゆ感かん佩はいせせりり。相あいあありりああららぬぬ。とといいふふありり  
速すみくく衝つとと立たてて走はりり出でるる。城き戸とののくく。いいままをを牽ひ居ゐるる。栗り毛もうのの駒こまのの鞍くらをを掛かけけ  
いいりりとと東とうをを望のぞみみてて奔はららせせるる。續つくく後ご者しやく四し五ご十じゆ人にん喘あせ々ざうとと逐おかかりりをを追お追おふふ。とといいふふ  
いいればれば又また粟あし飯いん原げん首くび亂らん度どハハそのその日ひ申まを比ひ及およぶぶ。とといいふふ。八はち九きゆう里りのの路ちをを来きてて杉まき門かどのの  
里さとののああららるる。並ならびび松まつ原げんをを過あぎぎ。程ほど不ふ後ご方かた不ふ遠とほくく。馬うま蹄ひのの響ひびききももああるる。

え之をば。あひうけに縁連が鞭を揚ぐ招きたるを。粟飯原殿苗り多と  
呼懸々々瞬間小乗着く馬あり内りと下立り。胤度ハ且後者小下知して  
その馬を勤らせ縁連ハ腰着る。茶竈の茶を与てその縁由をさぐぬまが  
縁連霎時呼吸を頤く。所詮の趣餘の議はあつた。殿ハ嚮ハ一大つを  
仰送これらふあり。抱く環れと仰られり。と引之へへり。とひ胤度  
異様もあつた。その何の致知るや。あつた。遠路を戦ひ。蹟所邊をよ召あめ  
あつた。大つた。あつた。一残あを。揚めへ。とひ胤度。とひ胤度。とひ胤度。  
後者ハ縁連が乗捨る馬を牽く。舊来一。路へ衆皆齊一立帰れ。バ  
縁連ハ胤度と。雜彈一。つと。程ハこの日ハ既ハ黄昏。浩処ハ縁連が  
後者ハ後馳ハ走り。着く。あつた。或ハ二人。或ハ三人。一里餘の程ハ。とひ胤度。  
人あつた。胤度これを討り。縁連をえり。とひ胤度。とひ胤度。とひ胤度。とひ胤度。  
とひ胤度。とひ胤度。とひ胤度。とひ胤度。とひ胤度。とひ胤度。とひ胤度。とひ胤度。とひ胤度。

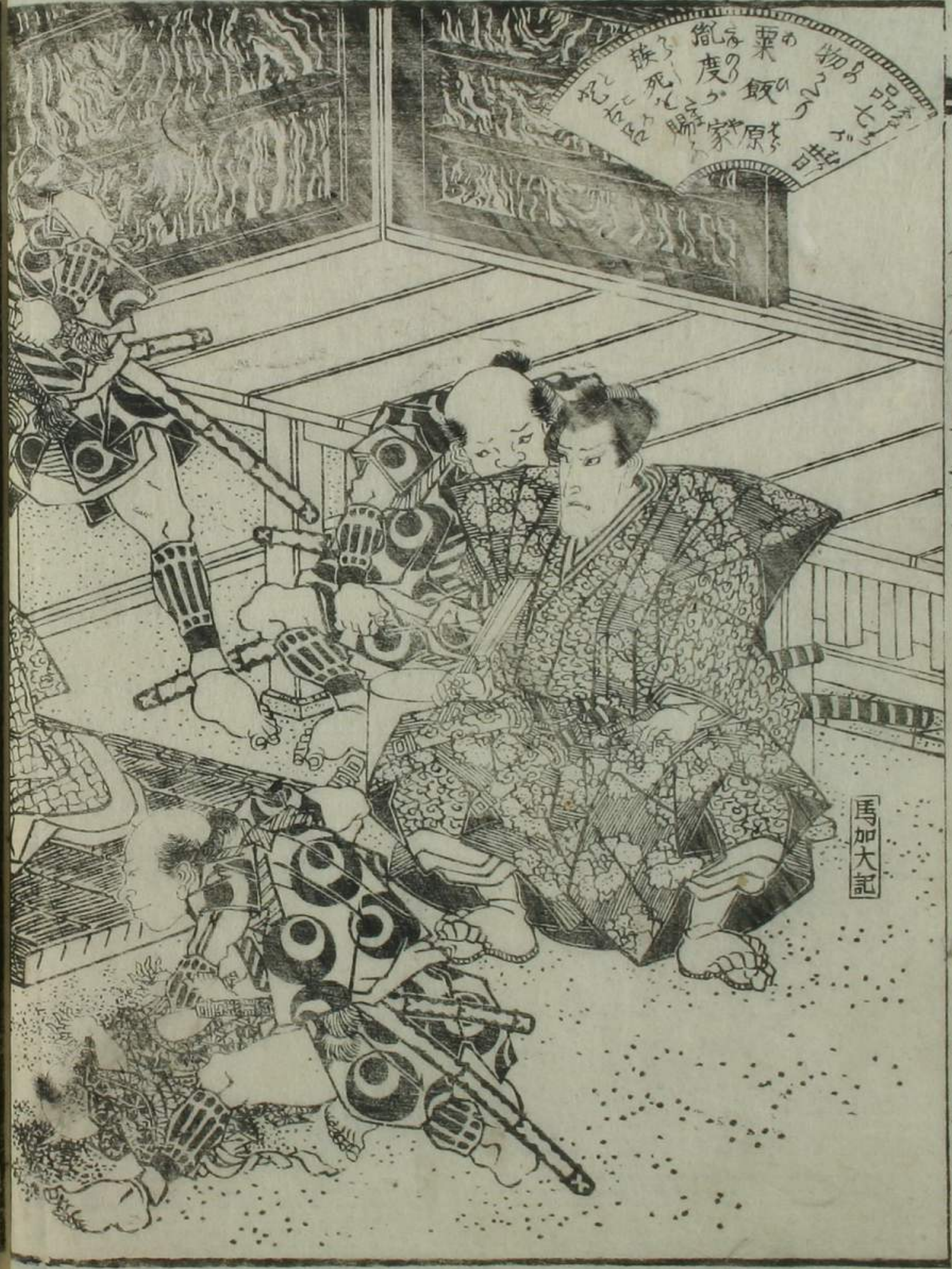
許多具せられ。と問れて縁連声とゆり。このより亦別。残ハあつた。和主を  
誅罰せん。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
着れ。あつた。あつた。胤度も共ハ刀を技合して。両三合戦。あつた。あつた。あつた。あつた。  
深獲ハ右ハ衰へ。只受あつた。あつた。胤連ハ踏込々々。あつた。あつた。あつた。あつた。  
推貫。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
縁連声高。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
せられ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
譜代の若黨村主。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
殺る。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
敵を。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

左右等しく縁連をさし挟むの攻戦へはあられ暇あつた時小並松の  
 樹蔭より頼被りせし一箇の癖者忽然と頭れき道次を捨措る嵐山の  
 尺八小篠落葉の両刀を早く箱より引出し小腕を抱き逃人と  
 程もあつたを亂度か鎗奴逃ふことぞんじ。強がごとく走り去る癖者  
 等と叫けく鎗を捨て刺んとほむ癖者の件の三種を後方へ撲地と  
 投遣りく巨刀丁と引授受とめ逆へ進み追つ返す丁々發石と戦なりその  
 間小又樹蔭より頼被りせし奇怪の賤婦輾ぶか似く走り出く鎗と刀を  
 搔取く舊の樹蔭小躲る程小怯む挑むこの癖者鎗の蛭巻研削て  
 返す刀小鎗奴を砍けし血煙夕映残る王莽時樹蔭を出る賤婦と目を  
 指し微笑して造化精妙と夕間暮るも連拉く逃亡たり。さる程小籠山  
 逸東太縁連ハ既小件の癖者より笛と両刀を奪畧る為体を逆より

吐嗟と多し金吉銀吾と鏢を削る真中かれはあつた忙巻ハ乱れ金吉が撃  
 太刀小鬚三寸浅疾を負く既小危くをを折る縁連が後者小四五人  
 齊一走り去る金吉銀吾を前後左右小推取籠く攻つけく遂に刀小砍  
 けし。さる程も頭を捕まけり。かり。程小亂度が後者小ハ或ハ撃れ或ハ逃  
 亡敵一人もあつた。これらも縁連ハ緊要なる笛も宝刀も癖者小奪去れ  
 るれば有撃ふあつた。さる程も往方を索んとあつた。さる程も日暮れ  
 如此も他領のさるれば後難も亦料ごとし。さる程も忙々として躬方の  
 死骸も捨措つ亂度主後三級之首をりを携り路引ちる走りつ。  
 その夜を岩槻のほりある古寺小曉せしがはりくと思慮る小。さる程も  
 亂度を討捕これらも緊要なる笛と両刀を癖者小奪れればさる程も  
 解んとさる程も況撃漏るる亂度が後者小のこれより先小走り帰て

有り。終に許さるる。私の恨みあり。胤度をおく。てを欺撃。おま  
 り。と。い。ま。ん。ゆ。と。い。は。る。罪。の。命。不。及。ぶ。と。も。あ。る。一。所。詮。赤。塚。へ。ゆ。る。は。甚  
 危く。還ら。され。ば。安。否。似。し。り。父。母。ハ。既。に。世。を。逝。く。の。も。と。妻。子。ハ。あ。る。は  
 人。を。用。る。今。の。世。ハ。あ。れ。の。國。も。み。ま。主。に。赤。塚。の。日。の。照。り。の。ふ。三。十  
 六。計。逃。る。不。如。と。肚。裏。不。忍。思。し。つ。その。曉。く。不。只。ひ。り。往。方。も。あ。る  
 かり。あ。る。を。後。者。ハ。い。れ。を。あ。る。天。明。く。後。不。驚。駭。せ。且。く。倉。後。を  
 疑。せ。し。う。と。も。つ。わ。と。も。術。あ。る。ふ。三。ッ。の。首。級。を。携。り。倉。阿。容。々。と。赤。塚。へ  
 還。り。来。り。し。如。此。々。と。栗。飯。原。胤。度。主。従。が。撃。れ。る。為。併。胤。山。の。尺。八。と  
 小。篠。落。葉。の。兩。刀。を。その。折。癖。者。ハ。奪。去。れ。る。の。趣。又。籠。山。縁。連。ハ  
 その。曉。に。旅。宿。より。逐。電。あ。る。る。ま。だ。も。送。り。け。る。あ。げ。し。久。自。胤。駭。き  
 且。呆。れ。く。是。非。の。思。念。不。及。び。あ。の。を。竊。し。馬。加。常。武。を。招。け。り。と。緯。云。云。と

説示。彼笛既に紛失をれば守のむ答め測りて。つふを。と。問。え。ハ  
 常武も殊更。ふらも駭たる面色にて寢ふ。あ。は。れ。迄。変。り。所。詮。笛。の  
 紛失も。み。胤。度。より。更。起。れ。ば。渠。が。妻。子。を。誅。戮。し。仰。け。れ。あ。る。ん。あ。い  
 む。ん。不。異。を。る。む。答。め。の。あ。る。う。も。ゆ。ゆ。某。緯。を。計。し。も。併。の。ひ。の。と。答  
 む。う。と。退。却。す。実。胤。自。胤。の。兩。下。知。こ。と。胤。度。が。長。男。ハ。栗。飯。原。慶。之。助。と。く  
 今。茲。十五。歳。ふ。り。多。美。少。年。胤。腹。を。切。り。せ。併。胤。度。が。妻。稻。城。と。五。才。ふ。り。る  
 女。兒。を。も。命。を。日。不。殺。し。て。り。只。こ。の。人。々。の。も。か。が。親。族。妻。黨。も。罪。蒙。り。て。或。ハ  
 追。亡。し。或。ハ。閉。籠。ら。れ。て。憂。死。せ。る。も。多。り。誠。ハ。邯。鄲。一。炊。の。栗。飯。原。氏。の。榮。枯  
 得失。覚。く。悔。し。れ。夢。之。助。を。惜。ま。ぬ。の。の。あ。り。る。を。中。胤。度。の。妻。不。調。布。と  
 い。ふ。も。あ。り。有。身。て。り。三。年。経。る。ま。で。今。日。て。産。の。初。を。解。く。を。醫。師。も。後。更。その  
 病症。を。と。ふ。か。つ。は。決。り。し。て。こ。を。血。塊。の。病。と。し。を。し。く。その。療。治。を。せ。り。か。り



傳六郎卷三

涌泉堂藏

傳六郎卷三

涌泉堂藏



程小常武ハ被妾調布ハ胤度の送腹ありと云くこれを殺さんと云う一城。  
 相憐むもの哀告て醫師を以て燈人トつ決して有身らふあり血塊ハ疑ひや  
 とくく方書を引つて醫師も共不寛くとも常武ハ疑ひ調布ハ墮  
 胎の葉を三日づけく飲せしむるに原未血塊となりと遂に  
 追放されけり此ハ是今茲より十五六年の昔寛正六年乙酉の冬十一月の  
 日ゆぞありたりかて件の調布ハ些の由縁を心あて相摸州足柄郡大坂と  
 つ山里ハ在りたる程小常武ハ病悩ハ血塊なりと云の年の暮小子を産めんと云  
 三年むりの後仁元年丁亥の秋の頃誰いやく風毒せし常武はて  
 駭知中みそ安うぬと云老僕袖角九念次を大坂へ遣つて繚の虚  
 実を撈せし子を産むる一定あれども今ハ其処中住みて往方おれはと  
 云えくハ常武ハ靴を隔く癖を搔む心持しつわ月彼此と索しとも終ふ

便宜をぬき又彼麓山逸東太縁連ハ千葉家恩顧の郎黨也その  
 家柄も大なるがね年尚らぬれども胤度の亞ハ居られて赤塚殿の覚  
 あつたふ慈深く智浅うして年暮胤度と中とありたれ常武ハ屠略を食  
 主命を用ひしむ忠信篤実ハ胤度を欺撃せし眞罰立地ハその  
 報ひく可惜ハ俸禄をたれ棄て谷磨の日蔭者ハなりたるを云く知も知らぬ  
 御をぞ憎む朝日笑ひたりあれども石濱ハ年来多病なりと云  
 繚みハ常武一人ハ任用しあひつて此ハ胤道世の願ひ頻りあり當時の領所  
 悉舎弟自胤ハ讓あぬせその身ハ美濃ハ退隱してゆく程はかくせと地  
 あひつてこれあり鎌倉の両管領より二郎自胤を千葉介ハ補任して石  
 濱の城ハまえ置れ武藏七郷葛西三十ヶ荘管領せしめあひより今に至  
 繁昌せりは馬加日記常武ハ繚みハ己ガ随意謀濟し権勢肩を

比ふものあり主の自胤も渠の彈りのあふまをわあく一山の笛の事も実亂  
 あり知やくその家督をえ嗣めへ皆常武を徳とく権威を貸めへある  
 ぞ。ありとあひ合する胤度の撃れ折常武竊小地方の悪棍並四郎を  
 相彈く件の笛と両刀を竊せざる不疑ひなり。その折の賤婦八並四郎が女房の  
 船虫をわかれ命後笛と両刀八並四郎が所息より小篠落葉此両刀を  
 竊ふ他郷へ齎しよよた價小售さるられ嵐山の尺八古代物の物弁て今此  
 笛と異われが好く買んとつれなく且時曾ある秋をどのけりた不憚と  
 年来秘おれたる事も果して此らんをのり比中途ゆく阿佐谷の村長ホを撃  
 走しし船虫と奪去る衆人の癖者も馬加との間諜者一同定ぬ狐ともかん  
 つちかれが船虫が責りして若し彼が不首伏せば彼人の舊悪れあつるべしと  
 せがしゆもかん牙を推笛り辛く閉籠措ももとら疑念あつぬが人斯

長々一は彼人の年来の悪計を誰も知るとのちつちと不祖渡増松といひ危  
 後若黨ハ馬加との腹心で機密を掌りたれども絆お毎々賞禄の多きを  
 しく恨みく件の機密があるべし如此々と漏せし語續け彼は今で  
 知らぬものもあればかの威勢不憚とくせえ上るものもあれば守ぬ知し  
 あり馬加とのちつちの疑ひあつれば彼増松が口を利と曉りて  
 毒飼とせられく程も増松ハ一夕睡滅死する。かれが死す朝名食  
 物不用心く鋭く謀られしを。其く程小男此童がとや夕饌をりて  
 つの程ちる後方おりの長物より小文吾と訣を捨て夕餉の箸を把り  
 めつせむとわれくへる小文吾と共小駭く品七ハ慌忙に箸を取て塵括隻ふ  
 引提つ折戸のちつち立ゆきあ閉ぢと鳴れば外面より人の牙を鎖と披き  
 品七と牛と楚と閉れども現指られぬ人の口吁天言ハ声あつてくく不徳慶の

掩ひてはを以てありて。小文吾竊小舌を掉りて。終饌に向ひても著る  
 る此頼まきも。不為歎息。已きりたる。かゞその日の暮果て甲夜より。どろ春  
 雨の音蕭然。更蘭之のを寂し。鐘の声寂れぬ。まふ小文吾の獨泣く  
 ありて。彼常武が人と知り。これ大く猜せり。まふの品七が巨細あり。ひひ  
 かゞその隠悪を。笑し。むむの資を。かゞこの後の用心。ふか。むむを。まふ  
 され。馬加が若黨。粗渡増松。とふの。毒殺せられ。といひ。一條。て今  
 けり。あひ合せ。れ。ま。れ。亦。日。あり。食。後。猛。不。腹。痛。く。い。堪。が。れ。日。の  
 あ。ま。い。不。菜。の。野。藏。あ。る。と。か。れ。が。獲。身。囊。と。う。披。き。感。得。秘。藏。の。玉。を  
 出。て。或。は。尾。尾。推。當。つ。又。あ。る。は。口。合。て。その。玉。液。を。吸。入。程。不。苦。痛  
 忽。地。と。ひ。つ。だ。く。心。持。清。く。う。知。る。も。幾。度。と。の。み。て。を。お。ぼ。し。た。こ。ま。必  
 か。の。腕。中。に。あり。ん。毒。不。中。れ。と。尺。の。玉。の。奇。特。不。依。て。る。ま。不。恙。あり。と。い。

かん嚮。小犬川。莊助。大石。憲重。の。獄。舎。を。笞。杖。の。撲。傷。の。頓。不。疾。一。も。亦。彼  
 玉。の。冥。應。を。れ。裕。と。云。恰。と。の。ひ。冥。玉。の。加。護。疑。あ。べ。う。虎。呵。神。の。う。妙。妙。  
 久。ね。せ。ハ。塞。翁。が。馬。中。く。戸。田。川。の。窮。厄。ハ。十。條。カ。二。尺。ハ。ホ。ガ。助。め。り。く。吾  
 曹。い。あ。ひ。り。け。か。く。虎。口。を。脱。れ。今。ハ。千。葉。家。の。尺。八。田。あ。ふ。ま。身。を。殆。危。く。せ。り  
 彼。ハ。忠。信。義。烈。の。兄。弟。此。ハ。音。曲。尚。古。の。名。物。尺。八。の。名。ハ。等。一。と。利。害。損。益  
 甚。異。あり。ま。が。厄。今。ハ。解。む。と。い。ども。彼。栗。飯。原。不。比。れ。ハ。屑。あ。わ。あ。ら。り。に。  
 け。く。あ。く。も。栗。飯。原。氏。の。送。腹。あ。り。子。ハ。生。育。一。次。宇。宙。の。間。ハ。不。平。の。う。渠。不  
 あり。る。もの。あ。ら。あ。る。嗚。呼。憐。む。べ。一。憐。む。べ。と。繰。返。し。る。骨。の。中。不。積。日。數。の  
 春。過。く。夏。ハ。来。れ。ど。も。彼。品。七。ハ。尔。後。掃。除。不。来。と。か。れ。バ。小。文。吾。竊。不  
 訝。り。て。一。日。又。草。刈。不。来。の。蒼。頭。不。彼。品。七。ガ。り。を。問。ふ。その。ゆ。り。答。て。  
 品。七。ハ。し。ら。ぬ。月。の。く。日。や。あり。ん。あ。へ。庭。掃。除。不。来。と。次。の。日。ハ。



常武は報しう常武はくち領地は日あり故亦を密張孔目は  
 あつてもこれのしを知らぬ誰中あれこのもさう蔭をいふ  
 とく知らせよと長き示し壺の菓子と紙小包を投与へり  
 是より品七を心おそく憎む然る罪せんやの果一と  
 小文吾が猜せしとく竊に毒殺あつてこれあり常武はし  
 旋の品七奴が口を嗜りあり小文吾はくわびを知り  
 年来大望あり彼身徳の例は傲く自胤の腹を切らせ  
 當城の主と千葉介をあらんとあつて日あれども自胤は鎌倉  
 領との後衛あり管領これを非義として大軍をり攻められ  
 求むとあひて年月をくく過せが方便をりく小文吾は腹心  
 孔明後醍醐の楠公も劣るるは喜あつてと方寸

計較既小決りつ折も欲得とあり程小此一鎌倉より女田樂の色子共  
 五六名石瀨の城下小来ありし常武はをり声色を嗜む鳥辭の  
 騎者ありしは技小長て且貞妍は淫婦を多く婢妾とて生平小歌舞せ  
 費と數ふとく幾月の久しを家小置く酒宴の具を備ふるを  
 この度も件の女田樂小招れりその技を試みる小中且開野と  
 少女の年ハ二八より顔色も美しく技小堪能のものありしは只一人  
 白駒の足極速うき月も近なり豫てもあるとあつて主君の疑念  
 解せ良寐口小苦の故小諫言その甲斐は恥く心ありは疎遠に過  
 たり斯長々しは籠居をいと痛くをりて切く母屋へ招き



常武へやとる盃とり揚ぐ大田との且毒嘗と仕らん暴お君命謀るよ  
 甲斐かく肝膽もか河胡越は驚く可憎世の豪傑と入る籠おあつた  
 意外の趣舎羞はまほ餘りありあつたふかう物解く膝をおどえ  
 歡びを盡せと一朝の苦心あつた主君の疑念と些下へ釋はる某月  
 ぐられ方便とと亮察しあつたといひてその盃をさぐれば小文吾  
 進寄く受戴はく盃を側し措く左右の飲も寔は圖らるふより去歲  
 より衣食の頓養小預り今亦山海の魚蔬を羅られて浅うぬえ款待を  
 受もを皆を賢大夫の客を愛しあつた好意あつたをさぐれば欽ひあつた  
 これ小優なき某の素市井の匹夫に近う故ありて兩刀を帶るとはた力  
 一階の格式かく人子敬く徳もや然るをかくる懇切の謝しきるも  
 憚りありとのを常武さあへむその又介意あつた不似たり故の席おあつた

とあつていられ小文吾の盃を持て退ち酒の飲むややと竊小枕中へ  
 傾け捨有も箸を添え露をりも食ざりたるをさぐるとさ程小日へ暮て  
 彼此小置並べる菊澄臺は銀燭の死衆星の晃く如く和漢の細工を尽く  
 方圓の盃盤の恰室の巾入る似たり浩処小年四十をりある老女の摺箔  
 たる夾衣を被て六ツ七ツむりある女の子のよを掖ると甘あありける男子は肥  
 脂盈る身長も下皮を脱が黄黒の袴を穿るとさあつた立進して小文吾  
 揖とつ躬てあるは傍あり常武これらさるなりと小文吾も對ひ大田の  
 是ハ前婦戸牧之彼ハ拙郎馬加鞍弥吾之母のほりある女兒を鈴子と名  
 める子ハ四五人奉れども多くハ襦袢の中小喪して今小冢子と季女の残り  
 ちかくかりありとの小文吾膝を進めて欽ひと逆名告をさる小文吾も  
 鷹揚小辭寡く応答訖とバ鞍弥吾も無礼げ小英名ハ去歲ありして

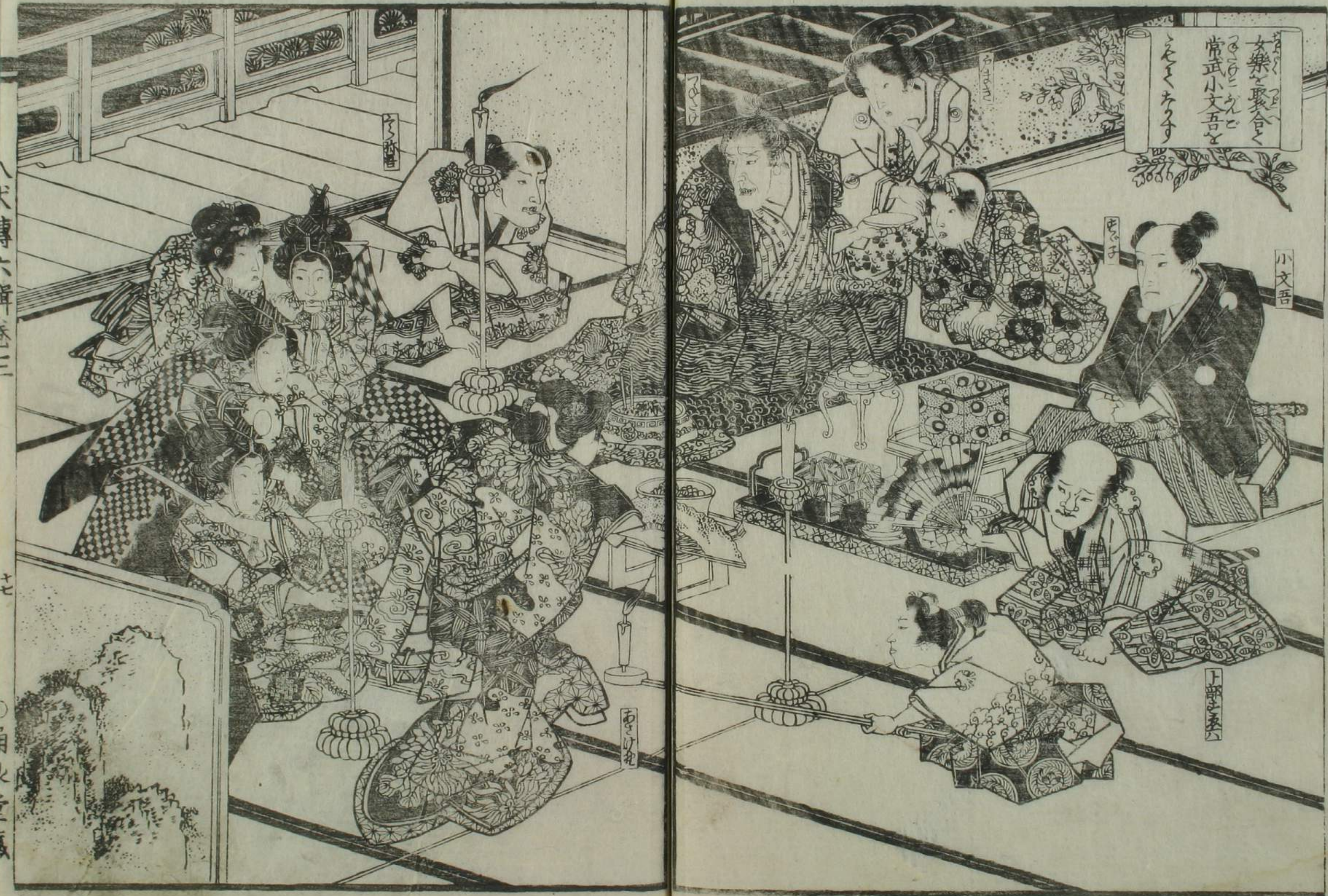
耳の裏なる犬田との君父の憚りありければ面をあらせかこりて本意  
 かくとひひらふの因坐の一刻千金先や背胸を露せし武藝の業の  
 りければ弓馬撃劍槍棒卷法人の劣るるのあつひどもいふで度遭ふは  
 戦場の進退の熟士小穰りも姑くいらぬ折もあつた試合希ひといふ  
 常武微笑く何を孩児が小さうけおあけし魂いづれもあれば折あり  
 四天王を召下りて酒を飲せよやよとく急せよ次の間小聚ひ居る  
 馬加が股脇の若黨渡部綱平と部季六田井貞九郎坂田金平太所  
 阿と応じて進み入り額をつ死その席末の居並びく愈小文吾の対ひ  
 裏の當所へ入来の折主人の側侍りて面を怒られぬ人某の渡部  
 綱平某の云と名告をせれば小文吾はと慇懃の礼を返し各各位を  
 源頼光の四天王も劣らざる勇士とい誰も知るべし姓名といひ骨相といひと

憑くくはとられて四入の羞る色かく賢察のめく不幸中と腕を破るべき鬼  
 女はぬあつて蜘蛛をどの変化も物野飼の牛小ころを付れど鬼童丸も  
 躲れをびと野の道の遠くれば大江山路を踏み酒顛童子が舊迹  
 どもえりてとせぬぎりし残念至極ゆと續語為句の似非的宏言小文吾は  
 堪ぐら笑を袖小包あむらむ咳を紛らふかて又さかある散を添て  
 けと遍とく盃を巡らも程小鞍弥吾と綱平のいづく解ゆる癖あれば  
 愈輪のゆく小文吾をとり環り誇り武藝相撲の技をせし嫌なく  
 論されば常武これを推禁ゆくあはれや何をもまづ武士の武士とて  
 糞杖の糞杖臭がめくそを素より比るればめづるけあくと嗚呼や  
 立のくと退けと季六のと呼苗り汝の要時其処をれか分付る要り  
 ありとあらはさすの微笑あつ小文吾をえりて犬田とのさそを傷痛を



〇。ソノ。め。い。も。も。さ。あ。ち。け。い。の。酒。の。料。あ。れ。ば。心。あ。わ。け。ぬ。ひ。を。た。ま。く。憂。を。慰。ま。す。  
 〇。ソノ。め。い。も。も。さ。あ。ち。け。い。の。酒。の。料。あ。れ。ば。心。あ。わ。け。ぬ。ひ。を。た。ま。く。憂。を。慰。ま。す。  
 〇。ソノ。め。い。も。も。さ。あ。ち。け。い。の。酒。の。料。あ。れ。ば。心。あ。わ。け。ぬ。ひ。を。た。ま。く。憂。を。慰。ま。す。  
 〇。ソノ。め。い。も。も。さ。あ。ち。け。い。の。酒。の。料。あ。れ。ば。心。あ。わ。け。ぬ。ひ。を。た。ま。く。憂。を。慰。ま。す。  
 〇。ソノ。め。い。も。も。さ。あ。ち。け。い。の。酒。の。料。あ。れ。ば。心。あ。わ。け。ぬ。ひ。を。た。ま。く。憂。を。慰。ま。す。  
 〇。ソノ。め。い。も。も。さ。あ。ち。け。い。の。酒。の。料。あ。れ。ば。心。あ。わ。け。ぬ。ひ。を。た。ま。く。憂。を。慰。ま。す。  
 〇。ソノ。め。い。も。も。さ。あ。ち。け。い。の。酒。の。料。あ。れ。ば。心。あ。わ。け。ぬ。ひ。を。た。ま。く。憂。を。慰。ま。す。  
 〇。ソノ。め。い。も。も。さ。あ。ち。け。い。の。酒。の。料。あ。れ。ば。心。あ。わ。け。ぬ。ひ。を。た。ま。く。憂。を。慰。ま。す。  
 〇。ソノ。め。い。も。も。さ。あ。ち。け。い。の。酒。の。料。あ。れ。ば。心。あ。わ。け。ぬ。ひ。を。た。ま。く。憂。を。慰。ま。す。  
 〇。ソノ。め。い。も。も。さ。あ。ち。け。い。の。酒。の。料。あ。れ。ば。心。あ。わ。け。ぬ。ひ。を。た。ま。く。憂。を。慰。ま。す。

婦のうしろも向ひく額を又小文吾も額をのれを終些一退却てこの  
 席の中央を前面さふよして常武の咲け小逆おををさるのててまよ  
 季六よ汝の何とあやんこれ程の俳優小閑場の白かゝる素本の源氏を讀ふ  
 似たり汝の武藝のめがを様ごうもあろをゆれが嚮ふ呼とあ置るるまよこ  
 と促せ季六の醉小乗して些も推辞む氣色かく仰寔小理りもよくとひ  
 りけく扇を取て島歩小進こ出つ袴の襷襜を左右小合て披せかづ件の  
 少女が左のこふか直り膝折伏しく要時額つれ頭を搦く詛るる声を  
 ゆり發し東西々々南北中央この席上ある大人君子へ敬て報なる罷出るる  
 少女子ハ薪推る鎌倉下り名を豆閑野と呼て甲斐小當今日の出れ堪  
 能めの當処へ初度の見参咲も揃ぬ初花小降そぐ雨の足拍子扇の風の  
 む毎の間小聊失つとありともその海津藻の丸目小蘭もんとと廢幾まらぬ



女樂を聚合し  
常武小文吾と  
とくちあす

小文吾

下野

雨

川

七

川

小文吾

川

抑田乐的幾番ある題目も亦多かりとを教へんはとゆりあられ就中呪師  
 侏儒舞田樂傀儡子唐術品玉輪鼓八玉之曲獨相撲小獨雙陸無  
 骨有骨延動大領之腰支蝦渡舎人之足仕水上專當之取袴  
 山背大脚之指扇琵琶法師之物語千秋萬歳之酒樽腰鼓之胸骨  
 蟾蝦舞之頭筋福廣聖之袈裟求如高尼之極祿乞形勾當之  
 面現早職事之皮笛目舞之箱體巫遊之氣裝貌京童之虛左  
 礼東人之初京上これら八男田木の會宗といふ所あるを又この君を  
 男の技中堪能ゆく幾節竹の一本立八尋細の綱渡これゆを特不  
 本事之さへゆりあぐる更閑されば以後會の事といふやうに今宵八且  
 今様の舞踏の態を仕らせく御笑ひ侍へまつん是則桃源の故うふ  
 做ひるゝことも愛され一曲老山各ノ桃と名つけりその為閑場介あま

工と嗜りけり移り逃さぐ如く次の間にて退けり跡ハ吐と婢女ホが腰を  
 抱へ立もあまの堪む弗と噴きつるそが終俯しく笑あり山田の畔ハ  
 樹隠れて日影不樂と集る木兎のうらも知らを群雀もれり狂入散動  
 目く鳴も已ざるを于有然程はあろうと苗の音ハ鼓のあべ打をえり  
 立であれる且閑野が態も體も美し抑是ハ讚岐州八嶋壇の浦のゆり  
 あり弓削山の麓に住ひの賤婦や一日里の以女子とつれ立き同國八栗  
 山遊びひ程ふまの谷川の水よりゆも愛され盃の流れをてはば原来  
 この山の奥を浮世を避くる神仙のまじりまをゆり何処もまじりけ  
 登りくくつとそをえとむひハ峯の白雲谷の水源遠く茶てえれば現  
 玉鉾のみちをせふあつては桃の林うを唄ひ出せる声燈々佛比國に  
 ありて鳥の辺陵嶺伽もかてそとを目あ年死舞の袖翳を扇の蝶々の

閃めく桃の花 釵見小光照添み 燈燭の花や物より 序破急の節曲比類  
 かづ世の俳優人の教わらば 常武夫婦鈴子小ハ瞬もせむ 見惚  
 る 紙門障子のあけより 覗く 奴婢小の幾人 欺人を搔みけ 推し  
 あへも 頭小頭をうち 累ね 目小目並べく 餘念おれ 眺み 時を移り  
 かて 儂曲も果し 戸牧ハ豫く 婢見小ハあち けさせ 纏頭の 小袖  
 一襲をめていそぎ 且 閑野ハ取らせ 肩小ハあち 横笛  
 鼓の 婢見小の先小立を 退れ 時ハ四月の 下院ゆく 夜ハ短き  
 比かれ 曉も 鐘の 声小東ハあち 小文吾ハ困り 果る  
 俳優の 稍終ると 夫婦小別を 告ぐ 退き せんと して けり 疾  
 常武 頻り 小推苗 何ぞ 急ぎ 是処ハ 彼処ハ 殊  
 この 新亭ハ 眺望の 為 建り 彼首の 窓を 推開け 墨田河の

流れ 大く 即便 これを 臨江亭と 命け 又 樓上より  
 眺れ 牛島 葛西の 海邊 眼小下 小わを 對牛樓と 名つけ  
 り 誘へ 薄茶 一服 進らせんと 小文吾 推辞 小ハ 側小  
 置る 腋挿の 刀を取て 立んと 白銀を 造り 小ハ 桃花の 釵見の  
 何の 程 落か 緒ハ 挟り 小ハ 討つ 小ハ 討つ 小ハ 討つ  
 侍り 小ハ 婢見 共を 見へり 何人の 送る 達 小ハ 問つ  
 取て 小ハ 一箇の 婢見 受とり 小ハ 且 閑野 物小 侍り 嚮 小ハ 茶を 捧げ  
 と 振送 せし 小ハ 小文吾 領 小ハ 遊 与 小ハ 楚と  
 届け 小ハ 小ハ 對牛 樓 小ハ 登れ 常武 小ハ 婢見  
 小ハ 雨戸 送 小ハ 閑 當下 小ハ 文吾 小ハ 且 頭を 叩て 彼此 小ハ 樓上 小ハ 東向  
 中 僧一山 小ハ 款印 對牛 彈琴 小ハ 四字 小ハ 額を 掲げ 左右 小ハ 唐の

王勃が蜀中九日の詩を白字に鏤る竹聯あり時ハ今夏と秋との違ひ  
 あれども大田があやちあも亦望郷の基中へ北地より来る鴻雁をかえれば  
 ともんと詠れる都鳥ハ今もあつるごとくて欄干ふゆを倚せてはくくと見  
 るとせ天のそ明し横雲の色紙わたる筆ハおれを誰が硯せ墨田河  
 前面は黒地牛嶋ハ宛も水臥せざるや彼方蒼蒼柳嶋ハ糸ある清小  
 靡くふ似たり世間ハ何は譬人朝閑趾如如と満誓詠る歌をあつ  
 波ハ魚翁生涯一葉の舟東へ漕ぐあり西に歌るあり葛西村落幾  
 戸の烟南に沖あり北に滅るあり鎌田浮田行徳の浦々あれ秋とぞ  
 夢目も迫り登る旭を奮里の方とるれが翁さびし父の久又親戚の  
 り胃小湛之あつる甲斐とをれ剣刀刃を浮橋の中絶し石濱の  
 玉塵より散し蘊れる艱難憂苦の遺頼ハ絶てありけり常武これぞ

慰めく大田殿々々々々物を必ひあかど尺蠖の伸んとすると死且その  
 身を縮むるへの窮達時あり運ふあるとこれ彼船をえあはせ久し  
 水際ハ繫れらあり又真帆揚る走るあり繫れり船ハ走るるハ走る  
 船ハ苗やがと和殿が今の滞申も只この理をり悟るこれとぞふ  
 譬しては君ハ船あり臣ハ水あり水ハよく船を浮べく又よく船を覆せ自亂  
 暗愚の弱將菽麥とぞも辨へぬされはり和殿を知りぬあはれ彼鄰  
 國の敵のあふ滅されんと疑ひ申某も亦千葉の一族馬加光輝が怪  
 かれは代り取るとも誰り答やん然れば享徳の例ハ倣く自亂ハ詰腹  
 切らせも見鞍弥吾常尚を當城の主ハせまぬとあはれふあはれぬとも  
 智勇の軍師をゆむ和殿今よりこれを佐けく事成るとは葛西の中  
 半郡を宛行のえりけり引とんやと小藤を進めて亦他もあはれ其けり

小文吾等々々貌を改めあをひくけもあに密後を諒せしものう於某素す  
 学問せられ聖の教いあふ知らねと譬を取て利害を推ん爰所ハ只水と  
 船との反覆を説多ども順逆の理は暗知あふぢやいつやとあれ水の船を  
 浮むるハ経ありその船を覆まら変之苟も只その変を己が利としてその経と  
 取らざるもれを乱臣賊子の心あふべし君臣礼あり舟車は楫あり君臣  
 礼を失ふは舟車は楫を失ふがや一旦その利をばるといふとも滅亡  
 せんや疑ひ申しあへあり臣とてその君を弑せしを誰うよくその文  
 字を保ちたる希望ハ非義の妄想を除去す千葉家の諸葛といわれ  
 徳誼後世ハ芳流し子孫餘慶を兼るをあるん某武藝を好むども  
 短才申す文学ありしやう人の佐とあるき只その志をわ忠信の狗と  
 とも乱離の人とあつととの念申す外ハゆづと憚る氣色もあつて  
 へいへ

常武ハ勃然と怒り面ハ見れても多と又た物つらぞ忽地荒余とあ  
 笑くつらと趣道理ハ稱入りこれハ亦如右あつ今之言ハ教を優  
 和慶を試しつらふああつと愚り心あうけあひを先早飯とあ  
 せんふこあふ事あつといひけく軀く樓下ハ誘引ひしと小文吾ハ後方ハ  
 立つ階子を下りて別を告又九念治ハ送られて幹津房ハ還りて  
 却説犬田小文吾ハむり縁類ハ立出く面を洗ひ口漱んと浄ハ盤ハ  
 立あつ程ハ母屋の庭あり流し入り寛の水ハ木葉あり浄ハ盤ハ  
 中ハ入る心ともあつ取あげつらふあ和ヲ羅葉とあつ木葉あり  
 その葉の裏ハ書つらあありゆかあつ怪とつら返しゆあつらふ  
 け入る葉とえたる麓路ハ流れもあつ谷川の桃一首の歌ハ續れ  
 熟そのころをあつあ昨日酒宴の席上ハ彼桃源の俳優とあ

且開野が所為かゞし。果してあつらんや。こが腋挿の刀の母と人。  
 彼叙児を送せしも意ありての事とある。これも亦馬加が誘せんあふ。  
 あつた。彼常武へ去歳よりして。これを推番め用菴よりし。ふ。きのふ。  
 猛小母屋小招起く親切めせし歌儂酒宴と。あつた。あつた。あつた。  
 渠ハ素より逆心あり。その主君なる自胤ゆと亡さんあふ。これをせりて。  
 股肱とせし底意ふよ。とあひ合せしその密残を説破り。密君と。  
 陽あつた。け引く如くあれども。ゆりて今さう志を改めき。のあつた。あつた。  
 かの懸むあふ色をりて。これを逆徒小引入さんと謀れる。これと。う。さ。ま。  
 あつた。あれども初より渠が密残小後つご。あつた。あつた。あつた。  
 罵辱しあふ渠又これを速小害せん。とて謀る。あつた。あつた。あつた。  
 時運あつた。あつた。あつた。今義のあつた。捨人命の惜むあつた。あつた。あつた。あつた。

送を親のす送小生死を契する。四犬士小環りもあつた。あつた。あつた。あつた。  
 せう索くあつた。空しくあつた。誰う又さ方だあつた。あつた。あつた。あつた。  
 おひひ彼をさへ。せ小稀あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 せうん人の物久既小覚期を究められども。脱せん程ハ脱るをよ。あつた。あつた。あつた。  
 優と申。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 餘のすも母屋の扱獲日。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 無吉又あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 せう五月中。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 一日甲夜より。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 十四日の月隈。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 脱落ふると。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

人音ひとね小文こぶん吾わがゆゆびびううもも駭おどろけけるる刀やいばを引提ひきだす縁えん頬ほの障せう子こをを
  
 開ひらけけばば紛まれれくくももああららぬぬ鑽あが隙がの癖くせ者ものももああららぬぬ刀やいばをを持もつつるる仰おほすす
  
 其その項うなじのああららりりありあり血ちのあららりり流ながれれるる何なんのあららりり
  
 且かつ疑あやひひ且かつ怪あやししくく白しろ昼ひるのあららりり明あるる月つきをを便たすす
  
 其その死し骸がいをを引ひききつつるる桃もも花はなのあららりり
  
 窪くぼのあららりり真ま中なかありあり
  
 癖くせ者もののあららりり常じょう武ぶがあららりり
  
 唐からをを猜あやみみししてて
  
 豫よろろとと怒おこりり
  
 少女せうにうのあららりり
  
 長ながきき

その如ごとくくゆゆららぬぬ
  
 傾かたくく月つきのあららりり
  
 この李り六りくがあららりり
  
 替かひひ
  
 せんせん
  
 深ふか水みづへへ
  
 松まつをを
  
 うう
  
 程ほど
  
 樹こ間ま





大車二

二十四

月夜



桃花乃  
銀見く  
刺客と  
敵の我  
氏

亦文五

大車二

月夜

ちる程小文吾をく走りゆく癖者等と叫びもあふを刀を昇りと引技く破  
 りんとほき吐嗟とをうり刃の下を彼此と潜り脱つ一間あり後がふ飛還く  
 やよ大田が吾を待て候り早まき怪我とさしあふをいし声かけ女子小文吾  
 訝とあふ刃と小腋引著然の誰と透しえふ天やもさる鮮明の月を  
 吐く雲を過過く限なき光小ゆさびえればえ忘れせぬ且開野はけりとも  
 とぞんとゆえん小文吾油断せぬ日面を怨むるのさく物ひひられともかた女子  
 似げかく夜をこわく垣を乗り界を記し潜びくまつる故りあると向質  
 まれく恥うらばふその疑ひの理りあふ響ふさか打りけくおん刃の仇を替  
 ぬる花釵見をえあめて心へ大くこあられもせん小物のぬえと相見る夏  
 野の男女郎花結が露の玉掛奇ゆらひあふあんとて神と名桶流  
 たる木の葉小示せ水莖の深たを今ゆふ知らぬ良ある薄情とも慥ぬ

悪く切くおん刃のふかりく死んとあふ覚期く牙あふと不便とあふ  
 心づくと怒むれば小文吾さく冷笑ひ得る技め世を渡る俳優かよも  
 わんま素あり色を好むは罪かき囚れどかり憂苦を外わす  
 化る恋小靡んやその実情あはるて竊小人相彈れくこれを惑を  
 便黠ゆをこつれては恨しけし顔はくともち瞻仰く嚮小贈り秋  
 のさか然の疑ひを稟もせん女子のうを有る花花釵見小血を添せ  
 誰か為かりたをあらん希婦の陝布胸あはるて尽を誠の届くはどく  
 殺しむひねと刃小怕を身を衝附し覚期の氣色小文吾はあふ及を  
 合直む刃を引提く背のくふ立遠りつあり揚も些も騒ぐぬ女子此一心  
 項を延し賞をうち合つつひねるを小文吾要時とらんをうく刃を輕小  
 細りも治りがら當座の難美は要時念とく辭をやさげ死をさる

厭ふ所も此痴情稍疑ひの解れども。いづく遍るも方の毒害とて。も  
 かへも久後遂ぐは妹伏とてひ諦めんとり。くろく入り。とてを且開野  
 えりの。然るもあつたのあつた。いつて。いふ。を付く。竊小脱とて。あつた。  
 身を束つ。寃ある人。小苦。あつた。後終。小命。を喪ひ。あつた。いふ。愚中。いふ。か。  
 と。勵。れて。小文吾。ハ。嗟嘆。不堪。ば。額。と。押拊。脱れ。去ら。く。もの。あつた。いふ。ま。  
 かく。あつた。あつた。人。彼。首。小鎖。せ。諸。折。戸。を。踰。入。ハ。輒。き。ま。あつた。夜。ハ。殊。さ。ふ。  
 出入。を。并。み。ぬ。城。の。門。戸。を。の。り。あつた。ま。死。と。いふ。を。且。開。野。に。あつた。ま。亦。亦。段。の。  
 伝。り。あつた。ま。この。廿。日。あつた。馬。加。殿。小。留。り。あつた。内。外。の。り。を。ま。く。知。れ。り。大。凡。  
 戒。を。出。入。ま。する。もの。且。ハ。晝。の。符。牌。あり。夜。も。亦。夜。の。符。牌。あり。竊。小。方。便。を。  
 伝。り。して。その。符。牌。を。入。ら。ず。あつた。難。死。と。いふ。いふ。其。死。示。せ。小。文。吾。ハ。  
 軟。面。小。あ。つた。れ。く。幸。ひ。の。り。あつた。又。各。め。れ。あつた。毛。を。吹。て。疵。を。求。る。

後悔。あつた。人。疎。忽。の。舉。動。あつた。あつた。ところ。を。付。れ。ば。領。地。く。いふ。ま。あつた。  
 只。此。く。日。を。過。さ。ば。あつた。あつた。危。う。ま。命。あつた。け。て。翌。の。夜。ハ。件。の。符。牌。を。  
 取。ら。ず。曉。ま。あつた。過。し。あつた。あつた。の。用。意。して。俟。あつた。ひ。と。遅。死。辭。小。文。吾。  
 感激。して。かく。あつた。あつた。助。け。あつた。あつた。脱。れ。て。あつた。あつた。を。保。ば。これ。天。縁。の。竭。う。ま。  
 豫。く。契。り。一。支。の。あつた。あつた。死。り。を。あつた。果。て。あつた。この。身。の。落。著。ハ。迎。へ。て。  
 妻。と。せ。ん。嚮。小。卜。部。季。六。を。留。留。ら。れ。銀。見。あつた。あつた。小。留。め。く。あつた。あつた。あり。  
 受。納。め。あつた。あつた。返。せ。あつた。あつた。あつた。龍。の。腮。を。撈。り。て。採。珠。より。も。  
 知。り。難。き。符。牌。を。取。る。あつた。あつた。あつた。命。を。果。敢。あつた。其。処。小。喪。ハ。秋。生。死。  
 不。定。の。大。目。を。抱。へ。く。この。銀。見。を。何。せ。ん。翌。の。首。途。の。向。草。小。柴。小。代。は。く。  
 道。祖。神。小。費。あつた。あつた。せ。んと。曲。演。へ。あつた。あつた。伏。閃。り。と。投。入。し。て。伏。拜。と。立。あつた。あつた。大。田。  
 如。い。ふ。あつた。あつた。あつた。相。禪。小。程。ハ。短。夜。の。あつた。あつた。明。か。若。槁。の。契。り。も。遂。小。

絶望し只翌の夜をまわす。ゆふとむせのひさしけ。故の樹の間を遠く。  
 裳褰げ。築垣へ登りしを。死田樂の技不熟。身の翻し閃と松小  
 身をうけ。彼方の庭へ降こと。姿のをばりあり。嗚呼伶人。も隠君  
 子より歌舞妓。亦節操遊俠。かゝらんや。む。逢阪山の蟬丸。采枯得失  
 遇不遇の理りを諷詠し。みづゝそれを琵琶の奏し。濁世の煩惱を  
 脱離せり。又華夏の静娼。ハ鶴岡の社壇。あゝ廷尉別離の愁訴。小伝小  
 吉野山の歌を吟し。右幕府の震怒を。恐れぬ。況んや千壽が重衡を。相憐て  
 死の不至り。又微妙が親を慕ふ。尼のかゝるが如。此の所の所を。ぬきりといふ。  
 畢竟且閑野。竊小文吾を。資け。又甚麼ある。話説りある。そを次の  
 巻不辨分。とらん。知らん。  
 里見八犬傳第六輯卷之三終

六編六巻之内三

校の  
踏巻院

